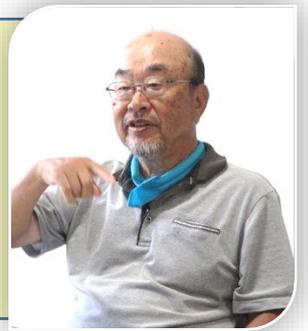


生涯学習この人に聞く その 19

生涯学習ボランティアをきっかけに 多彩な活動を楽しむ 増村一郎 さん

府中市生涯学習センターのボランティアを始めたことを皮切りに、外国語でも歴史でも何でも挑戦、週5日は軽スポーツを楽しむなどさまざまな活動をしている増村さん。各所で自主グループを立ち上げ、必ずそのリーダーになってしまうという氏に話を伺った。



生涯学習センターに関わることになったのは？

40年ほど勤めていた会社を、定年を待たずに退職したのですが、その後何をしようかと考えいろいろな情報を漁り、市民が参加出来そうなこと、興味のあるところには何でも顔を出すようにしていました。

そんな時に生涯学習センターがボランティアを募集していることを知り参加することになりました。当時は市民が個々にボランティア活動をしている時期で「悠学の会」という組織もありませんでした。その後、ボランティアとしての組織も整理され人数も増えて来ましたが、私のように当初から今日まで、つまりボランティア1期生としてこの学習センターに関わっている人間は現在ほとんど残っていない状態で、貴重な存在と言えるかも知れません。

当時のボランティアではどんな活動を？

当時はシルバー人材センターのパソコン(PC)講師として関わっていましたが、その後ボランティアグループが「悠学の会」となり、その中のPCグループで教え、他に講演録編集などをしていました。

PCはそんなに普及していたのですか？

確かに個人で所有しているのは珍しい時代でした。PCを教えると言っても、各部の名称や初歩的な動作など基本から入りました。基本をしっかり理解していると、機器の発展にも容易に対応出来ます。教えることになった当初の受講生は初心者が多く、電源を入れて立ち上げる段階からでしたので、基本が分かっていたら指導は出来ます。

中国語学習グループも立ち上げたとか？

昔読んだ三国志に興味があって中国に行ってみたくなり、これまでに十数回も旅行しました。中国語も学んでみたくなり、生涯学習センターの中国語講座を受けました。その後講座の受講者で中文学習のグループを立ち上げました。

そのうちに「府中国際交流サロン」があることを教えられ、国際交流にも興味湧いて、同サロンで日本語を教える教室や国際交流イベントに参加するようになりました。



「中文の会」の仲間と

郷土の森博物館のボランティアもされているとか？

「広報ふちゅう」でみたボランティア会員募集に応募して参加してみました。市内の文化財など貴重な史料を、きちんと整理して展示に供するための仕事です。温故知新で学ぶことの多いボランティアでした。歴史をより深く理解

するには古文書を理解しなければならぬと、古文書に関する資格も取りました。

その他にも何かされていますか？

府中駅近くに多摩交流センターというところがありますが、そこで「多摩紀行」に関する講座を受けてからその学習にも興味を持ち、学習グループに参加しています。

グループのメンバーで街道などを歩き、そこで見聞したことをまとめて冊子を作成します。頭を使い身体を使う外歩きは、一石二鳥の活動です。

ところで、週5日もされるという軽スポーツとは？

ターゲットバードゴルフという一般的なゴルフに似た軽スポーツです。バドミントンの羽のような球を使う競技で、スポーツと言ってもそんなに体力を使うことなく、誰でも参加できます。今日も先ほどまでプレーをしていたのですが、楽しく身体を動かすと気分も良くなりますね。

気づいたら、ここでも世話役ということになっていました。グラウンドでプレーするにはコース設定などが必要になりますが、その設計など運営面も自分でこなしています。



ターゲットバードゴルフ

多彩な分野で自主グループを立ち上げては、その場で必ずリーダーになっているように見えますが…？

後年あれをしておけば良かったと後悔することの無いよう出来ることは何でも積極的に取り組むことにしています。それで、何処でも他人の前に出ることが多くなり、頼まれれば断れない性分ゆえにそうになってしまうようです。

増村さんにとって生涯学習とは？

いつまでも元気であるために、新たなものでも何でも挑戦を続けることかと思います。もう無理かもしれないですが、日本百名山にも登れるものなら挑戦しようと思ってもいます。現在ほとんど毎日外出するような状態ですが、老化して歩行困難になる前に、行ける処には行く、やれることはやるを信条にしています。

非常に好奇心旺盛で、熱い情熱の感じられる79歳の増村さん。昔は年長者ばかりの世界にいたので、年少の人には無意識に強くあたってしまい、強面と思われ損をしたという。実際には優しさの感じられる好人物でした。載せたい話題はまだまだあったのですが紙幅の都合で断念。またいつか機会があれば伺いたいことが・・・ (記：小林清次郎)